

本山幸彦氏旧蔵 本山彦一関係資料の寄贈について

石 立 弥生子

このたび、故本山幸彦（1924～2022）元本学文学部教授・京都大学名誉教授の御令室 本山昭子氏から、大阪毎日新聞社第五代社長本山彦一（1853～1932、号は松陰）関係資料20点を当館へご寄贈いただいた。

本山彦一は、大正から昭和初期に大阪毎日新聞社社長を務める傍ら、考古学資料等を蒐集し、日本各地で発掘調査を指揮した。彦一没後、その考古学資料一式が関西大学博物館（当初は考古学等資料室）の所蔵するところとなり、2011年には日本の考古学史を代表するコレクションであることが評価されて、約2万点が一括して国の登録有形文化財の登録を受けている。

幸彦先生と彦一との関係について、昭子夫人にお聞きしたところ、幼少のころに本山家に養子として迎え入れられ、彦一のことを「おじい様」と呼んでいたとのこと。また、今回ご寄贈いただいた資料に「立半」または「立半静雄」の名前が記されたものが多い（図1）ことから、改めてお尋ねしたところ、立半静雄氏は幸彦先生のご実父にあたるとの返事であった。

立半静雄氏は、明治23（1890）年生まれで、大正13（1924）年に嘱託事務として毎日新聞社庶務部に雇用され、昭和3（1928）年6月に秘書課兼務となった。昭和5（1930）年1月に正社員採用となり、本山彦一が昭和7（1932）年12月に逝去するまで彦一の秘書をつとめた。

今回ご寄贈いただいた資料は、おそらく彦一から立半氏へ贈与されたものを幸彦先生が受け継いだと推察する。なかには大正15（1926）年5月8日付けで彦一夫妻が宮島の巖島神社から、同じ宛先（住所）の「立半静雄」と「本山幸彦」に送ったしゃもじ型手紙があり、生後間もなく2歳になるまでに改名していたことや実両親との関係が決して閉ざ



されたものでなかったことがうかがえる。どれも身近の者しか持ちえない、本山彦一の人となりを知る一級の資料であり、その一部を紹介したい。

まずは、彫刻家の曾村杜芽（生没年不明）による彦一の伎楽面風肖像面を紹介する。面の入る桐箱には、彦一以外に、高村光雲、坪内逍遙、徳富蘇峰、吉田芳明の名が連なった伎楽面風肖像制作曾村杜芽後援会による斎藤素巖や北村西望の推奨文とともに、坪内逍遙や徳富蘇峰の伎楽面風肖像面の写真が入れられていた。1913年にアジア人として初のノーベル賞となるノーベル文学賞を受賞したインドの詩人タゴールの肖像面もあり、興味深い。



戦後に青森の日本画壇で活躍した高橋竹年（1887-1967）の作品は、「太刀画」「秋草」「置物の猿」の3点あり、彦一がそれぞれ賛を揮毫している。竹年は、大正初年に25歳で大阪へ転居し、大正10年に大阪の十合百貨店で個展を開催している。



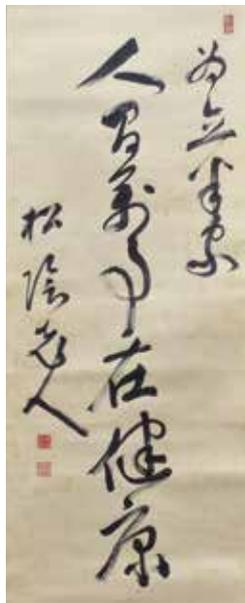
高橋竹年画「秋草」
松陰賛「ふかゝらぬ庭の草にも蟲のねのきこゆる秋となりにけるかな（『明治天皇御集』「蟲」明治16年）」

喜寿を過ぎた彦一が「天下本無事、庸人自擾之」と賛を寄せた九鬼隆一（1852-1931、帝国博物館初代総長）画の達磨図（図2）は、どちらも福沢諭吉門下であった絆を想起させる作品である。

北大路魯山人とも親交が深かったといわれる景正二十五世（加藤作助〔三代目〕 1879～1948）作の瀬戸茶碗（図3）には、彦一によって「日々是好日」の賛が入れられている。

その他、彦一が揮毫した書幅の桐箱に書家の高田忠周（1861～1946）が箱書きしたものや、

北嶺（多田北嶺か）画「三老人図」、昭和2年に毎日新聞社から表彰を受けたことを記念して造幣局で製作した銅製メダルなど、どれも彦一を偲ぶよすがとして、大切に受け継がれてきたことが伝わってくる。



左上から
 図1：本山松陰揮毫「為立半家人間万事在健康」
 図2：七十八叟松陰賛
 九鬼隆一画「達摩図」
 図3：景正二十五世作茶碗

彦一の晩年をみとった幸子夫人の作品も2点含まれる。「なき夫の手向けにおらむ花の上になみだのつゆぞまづこぼれける」は、おそらく彦一逝去後に偲んで作られたものと思われる。これには別葉で薄田泣菫（1877～1945）の和歌が添えられている。



書簡類には、1936年に大阪毎日新聞社の社長に就任した奥村信太郎（1875-1951）や役員に名を連ねる平川清風（1891-1940）、矢野龍溪（1851-1931）、日本文学界に「家庭小説」というジャンルを築いた大毎の初代社会部長である菊池幽芳（1870-1947）のほか、土居通夫

（1837-1917）、桐島像一（1864-1937）、谷本富（1867-1946）らのものが残されている。彦一の推敲の跡が残る原稿類やメモなどは軸装されて5巻にまとめられている。



幸彦先生は、日本教育史を専門とし、1988年に京都大学を定年退官後、1995年まで関西大学文学部教育学科で教鞭をとられた。当時は、岩崎記念館の4階に博物館の前身の考古学等資料室があり、本山彦一旧蔵コレクションを陳列して不定期に公開していた。1994年に現在の簡文館内に博物館が開設されたが、残念ながら開館記念式典の列席者に幸彦先生の名前は見当たらない。当時の関係者が、幸彦先生と彦一との関係を知っていたかは不明である。一言も教えを乞う機会のなかったことが悔やまれる。

近年、各所で考古学史研究が盛んであり、当館でも収蔵品の由来を中心に学史的アプローチに挑んでいる。なかでも彦一の軌跡を探ることは大きな課題であり、今回ご寄贈いただいた資料の調査研究を進めて、展示公開するなど教育の場でも広く活用していきたい。

なお、これら資料は、2022年2月20日幸彦先生ご逝去の後に、昭子夫人から京都大学での教え子らに託されたが、同窓の岩見和彦本学名誉教授を介して、本山彦一旧蔵資料を所蔵する当館へ寄贈される運びとなった。

この場を借りて、貴重な資料をご寄贈いただいた本山昭子氏、この間種々お力添えいただいた小股憲明氏（大阪府立大学名誉教授）、正田正博氏（株式会社シー・ディー・アイ代表取締役）、辻本雅史氏（京都大学名誉教授）、足立泰二氏（宮崎大学及び大阪府立大学名誉教授）、そして立半静雄氏についてご教示くださった毎日新聞社代表室一色氏にお礼を申し上げたい。

博物館事務長